

中学生の部

「鵜のころろ 鵜匠のころろ」

成蹊中学校 三年

稲田 百音 いなだ もね

激しく燃える篝火は水中で獲物を狩る鵜を照らす。しかし、その首にはしっかりと縄が結ばれていた。

私は、夏休みに祖母の暮らす岐阜県を訪ねた。その際、長良川で行われた「鵜飼」の見物に行った。鵜飼とは、鵜匠が鵜の喉を魚が通らないように首に手縄をまき、それを操りながら鵜に魚を捕らせるという岐阜の伝統漁法である。

ところが、実際にこの漁の様子を見てみると、私には人が鵜をいじめているようにしか見えなかった。鵜匠は手縄を身勝手に操り、鵜が飲み込もうとした魚を無理矢理吐かせて横取りをする。なんて人間の自己中心的な漁法なのだろう。私の鵜飼に対しての第一印象はこのようなものであった。

鵜飼見物の翌日、私は、一人の鵜匠が営む料理店を訪ねた。店に入ると、私は驚くべき光景を目にした。なんと、店の庭では鵜が放し飼いにされていて、店内はガラス越しに鵜を見ながら食事ができる構造になっていたのである。

「あの子らとはいつも一緒におりたいんやわ。仕事仲間でもあり、親友でもあるからな。」

と鵜匠の山下さんは私に言った。私は、意を決して山下さんに聞いてみました。

「鵜飼は鵜を傷つけているのではないか。」

と。すると、山下さんは笑いながら話し始めた。

「それは違うな。鵜飼だけを見た人がそう思うのは無理もないと思うけどなあ。ぼくら鵜匠は普段からスキンシップを大事にしとってな。鵜飼に連れていく鵜を決める時は、一羽ずつ顔を見て、喉をなぶって（触って）、鵜に触るとる手を通じて心で会話するんやよ。そうすると、今日は元気が良いのか、悪いのか、やる気があるのか、ないのかが伝わってくるんよ。」

そう言って山下さんは、私を鵜がいる庭へと案内してくれた。すると、山下さんの姿を見つけた鵜たちは、次々と彼の周りに集まり始めたのであった。山下さんは、今から今夜の漁に連れて行く鵜を決めると言って、

「みんな漁行くぞ。入れ。入れ。」

と手をたたきながら声を上げた。すると、すぐに全ての鶺が山下さんの指示通りに小屋に入っていったのであった。そして、山下さんは一羽ずつ頭をなでながら時間をかけて籠に入れていった。そんな中、自分から籠に入っていく鶺が何羽もいて、山下さんはとても嬉しそうな顔をしていた。

私は、山下さんのお話を聞き、人と鶺が心を通わせ、思いを一つにして行うのが鶺飼なのであると思った。また、今思うと、あの手縄も鶺と鶺匠を結ぶ絆のように感じる。山下さんは私に、動物との共存について深く考える機会を与えてくれた。動物は何であれ、人と動物が共存していくためには、互いのことを理解し、大切に思うことが最も重要なことだと思う。

山下さんは、話の最後を自身の詩で締めくくった。

鶺のころろ 鶺匠のころろ

今日語らい 明日又語らう

このえにし 鶺と鶺匠の一生なり